

尾首城跡発掘調査報告

—広島県立祇園北高等学校建設にかかる—

1984

広島県教育委員会

例　　言

1. 本報告は広島県立祇園北高等学校建設に伴い事前の発掘調査を実施した尾首城跡（広島市安佐南区祇園町北下安）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島県教育委員会文化課が、昭和57年6月から8月にかけて実施した。調査担当者、嶋田 滋、榎井 勝
3. 本報告の執筆・編集は青山 透、小都 隆、桑原隆博、榎井 勝、船橋孝昭が行った。
4. 出土遺物の整理復元、実測、図面の整図、写真撮影は青山、桑原、榎井が行った。
5. 本報告に使用した略号は下記のとおりである。

S P : 柱穴, S K : 土塙, S A : 石垣・石列, S D : 溝, S X : その他の遺構。

6. 本報告に使用した地形図は建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（広島・海田市）の一部を複製したものである。

目　　次

I はじめに.....	(1)
II 位置と歴史的環境.....	(3)
III 調査の概要.....	(7)
IV 遺構.....	(10)
V 遺物.....	(16)
VI まとめ.....	(24)

図 版 目 次

- 図版 1 a 造景（北より）
b 造景（東より）
図版 2 a 1郭全景（東より）
b SA5（南より）
図版 3 a SK3（南より）
b SX9（西より）
図版 4 a SX9埴輪出土状態（南より）
b SX9埴輪出土状態（北より）
c SX9須恵器出土状態（南より）
d 3区高坏出土状態（南より）
図版 5 a 2郭、3郭全景（西より）
b SD6, SX7, SA8（南より）
図版 6 a 2郭—3郭土層断面（南より）
b 発掘調査風景
図版 7 出土遺物(1)
図版 8 出土遺物(2)

挿 図 目 次

- 第1図 尾首城跡の位置と周辺の山城分布図（1：75,000） (4)
第2図 尾首城跡地形図（1：1,000） (8)
第3図 調査区及び遺構配置図（1：500） (9)
第4図 SK3実測図（1：80） (10)
第5図 SA4・5実測図（1：80） (11)
第6図 SD6, SX7, SA8実測図（1：80） (13)
第7図 SX9実測図（1：80） (14)
第8図 出土遺物実測図Ⅰ（1：3） (16)
第9図 出土遺物実測図Ⅱ（1：4） (17)
第10図 出土遺物実測図Ⅲ（1：3） (18)
第11図 出土遺物実測図Ⅳ（1：3） (19)
第12図 出土遺物実測図Ⅴ（1：2） (19)

I はじめに

広島県は、従来から高等学校教育を充実させ、適正な就学の機会を確保するため、県立学校の建設をすすめてきた。ところが、昭和58年度から本格化することが予想されている高等学校生徒急増に対処するためには、さらに数校の学校建設が必要になってきた。このため広島県教育委員会（以下「県教委」という）では、昭和56年度から県立学校建設用地の選定をすすめ、このうち第3学区の安佐地域では、祇園地区と高陽地区にそれぞれ一校を建設することにした。この報告は、このうちの祇園地区高等学校建設に先だって、事前に行った尾首城跡の発掘調査の報告である。

さて、祇園地区高等学校については、当初、祇園町の長東地域を候補地とし準備にとりかかった。昭和56年3月から7月にかけて候補地内の遺跡分布・試掘調査を行った。ところが、候補地内には当初の予想に反し、古墳4基（池ノ内第1～4号古墳）と弥生時代から古墳時代にかけての集落跡（池ノ内遺跡）が含まれていることが明らかとなった。さらに池ノ内古墳群については、そのうちの第2号古墳が、円墳ではあるものの直径28m、高さ3mの大規模なもので、墳丘周囲には埴輪をめぐらし、試掘調査時には三又の馬鍔が出土するなど、⁽¹⁾ 広島湾周辺地域においては学術的に極めて貴重なものであることがわかった。このためこの取扱いについては、古墳をとりこんだ学校の建設、あるいは古墳群をさけた学校用地の選定など、種々の検討を行ったが、最終的には遺跡の取扱いだけでなく、用地の取得も工期とのかねあいで困難であることなどから、この地は放棄し、第2の候補地である現位置（祇園町北下安字尾首）に変更することになった。そこで、この地についても、同年8月に分布調査を行ったが、ここにも遺跡が含まれることが確認された。すなわち、背後にある広島県史跡銀山城跡からのびる支尾根を利用した小規模な城跡で、地元でも古くから「古城跡」と呼び、また、広島市教育委員会（以下「市教委」という）による市内の城跡調査でも「銀山⁽²⁾ 支城跡」とし、銀山城跡の支城として位置づけているものであった。このためこの取扱いについても再三にわたって協議を行ったが、学校用地としては他に候補地がないこと、また候補地内に城跡をとりこんでしまうと現状では学校施設用地の半分も確保

できず、学校建設そのものに影響がでること、さらに銀山城跡の支城については、すでに昭和56年、市教委により民間の宅地開発に伴って沼田町伴の国重城跡の発掘調査⁽¹⁾がなされていることなどから、本城跡についても事前に発掘調査を実施して記録保存するということにした。以後、現地のききとり調査、文献面での調査などこの発掘調査のための事前準備を行った。しかし、文献的にはなに一つ資料がないことから、改めてこの城跡の小字名をとって「尾首城跡」と命名し、本格的な調査の準備にとりかかった。

発掘調査は昭和57年6月から8月までの約3カ月間、整理作業は翌昭和58年度にそれぞれ、県教委文化課が担当して行った。

調査にあたっては、地元祇園町大字北下安の方々や市教委から多大な協力をうけた。記して感謝の意を表したい。

注

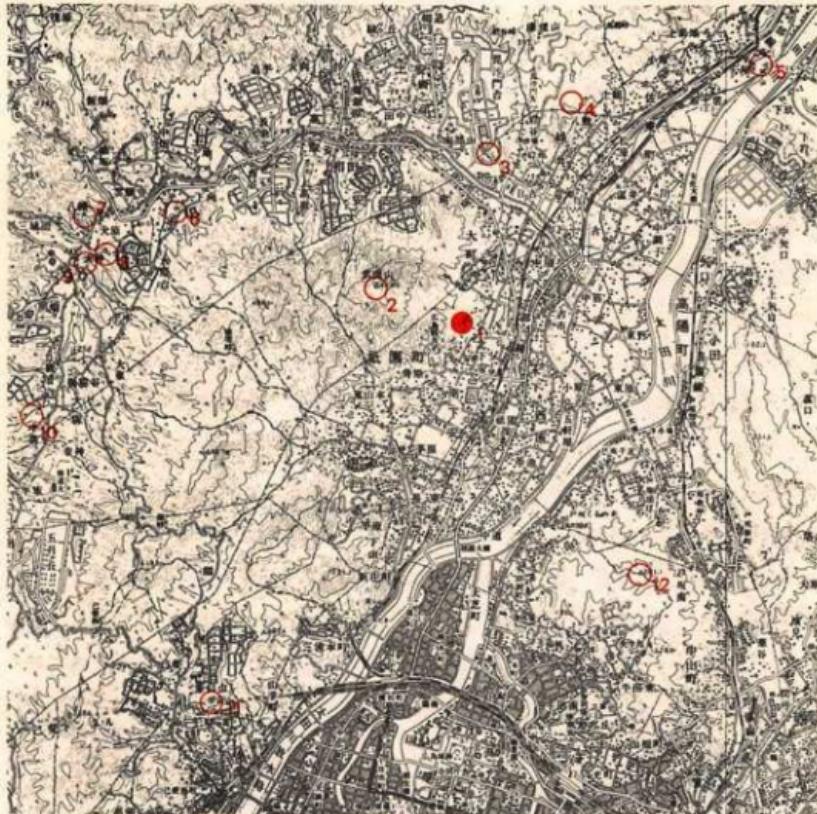
- (1) 松井和幸「鉄製馬歛」(『ひろしまの遺跡』第14号 1983)
- (2) 広島市教育委員会『山城』(広島市の文化財 第20集 1982)
- (3) 広島市教育委員会『国重城跡発掘調査報告』(広島市の文化財 第19集 1982)

II 位置と歴史的環境

尾首城跡は、広島市安佐南区祇園町北下安に所在し、祇園町と安古市町の境界にそびえる銀山城跡（県史跡）のある武田山（標高410.9m）の東麓にのびた小丘陵（標高64m）の先端部に位置する。この地域一帯は太田川下流域の右岸にあり、太田川の旧主流古川や安川の存在が示すがごとく、流路はたびたび変化し氾濫による沖積地が形成されたところである。安佐南区沼田町伴字奥畠を源流とする安川は、武田山の麓をとり巻くようにして東流し、小瀬地区（国道54号線付近）から南流して、古市橋、下安、祇園、長束を経て太田川に合流していた。しかし、たび重なる水害から安川流域の住民をまもるため、昭和30年に河川改修し、水路を太田川の旧主流古川に流れ注ぐようにした。このため、小瀬から長束にかけての旧安川は、わずかな水路を残すのみで河川敷は雑草におおわれ、水量豊かな安川の面影は消え失せた。また、古川は太田川橋の下流、安佐南区佐東町八木の八木峠付近から太田川本流と分れ、緑井・中須に沿って流れ、古市から祇園町西原を通じて太田川に流れ注いでいた。昔はこの古川を太田川と呼んでいたが、現在は河川敷を改修し、「せせらぎ公園」として市民の憩の場となっている。いつ頃からこの地に沖積地が出現したか、また、いつ頃から人々が住みはじめたか明らかにする文献は見当らない。ただ、太田川下流域や佐東町・祇園町の山麓に遺跡が発見されたり、海浜の名残りをとどめる地名（小瀬・中須・松原など）などから、この付近まで広島湾が入り組んでいたと考えられる。

古代におけるこの地域は、都～大宰府を結ぶ東西往還路である山陽道が、安芸府中から中山峠・戸坂を抜けて太田川を渡り、長束から武田山の麓をめぐって大町・安・伴を通じて佐伯郡に連絡していた。また、航空写真や地形図などから条里地割が残っていることがわかり、古くから開発が進んでいたことを窺い知ることができる。

また、古代の政治の中心地は、安芸国分寺のあった西条盆地や安芸国府跡といわれる府中町と思われるが、承久の変（1221年）後、安芸国の守護に任命された甲斐国の大庭氏が守護所を祇園町山本に置いたことから、この地に政治の中心は移っていった。その後、大庭氏が武田山に銀山城を築城するに及んで、この地域は大いに発展し、高



第1図 尾首城跡の位置と周辺の山城分布図 (1 : 75,000)

1. 尾首城跡, 2. 銀山城跡, 3. 白山城跡, 4. 中城跡
5. 八木城跡, 6. 国重城跡, 7. 岸城支城跡, 8. 伴城跡
9. 岸城支城跡, 10. 岸城跡, 11. 己斐城跡, 12. 戸坂城跡

田郡吉田の郡山城を拠点として中国統一を成しとげた毛利元就に銀山城を攻め落されるまで武田氏の支配が及んでいた。

さらに、尾首城跡及びその周辺地域の歴史的背景を理解するために、もう少し具体的に武田氏と銀山城跡について考えてみることにする。

甲斐源氏の一族である武田氏は、信光の時、1221年（承久3）の承久の変での戦功により安芸国守護職に任せられ、甲斐国守護職を兼ねていた。信光自身は鎌倉に住み、

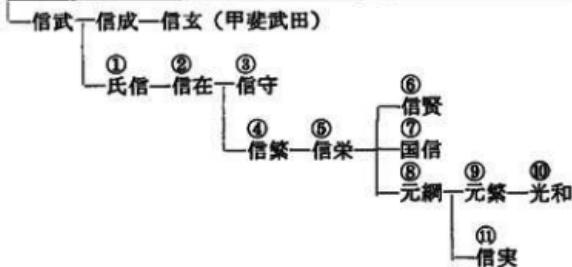
安芸国祇園山本に守護所を置き、守護代を送って政務を執らせていた。孫の信時の時代になると、鎌倉幕府の命により1274年（文永11）の蒙古襲来に備えて安芸国にやってきて、地頭・御家人を指揮し活躍している。その後、信時の孫の信宗が、鎌倉時代の末頃に、太田川の河口で守護所の背後に当たる武田山に銀山城を築いたといわれている。当時、陸路は先述したように、安芸府中から中山峠を越え、戸坂から太田川を渡り、祇園町長東付近から武田山の麓に沿って大町・安・伴を通じて五日市・廿日市に抜けていた。また、太田川は水路として大いに利用されていた。平安末期頃、嚴島神社の莊園であった志路原莊（現豊平町）から運び出される物資は太田川を下り、佐東郡桑原郷（祇園町長東付近）にある倉庫に納められていたという。また、太田川流域で勢力を振っていた地頭の間で川舟の通行税や年貢の積出し港（倉敷）などで争っていたということなどから、この地域は東西往還の通過地点であり、舟と船・陸と海との接点という水陸交通の要衝地であるといえる。したがって、このような水陸交通の要衝地を眼下に見渡し、さらに広島市中心部や瀬戸内海に浮ぶ島々を遠望できる武田山に武田氏が銀山城を築いた意図を窺い知ることができる。

はじめの城郭は武田山の南側の一角に設けられた小規模なものであったが、信宗につづく信武・氏信は南北朝争乱に際し、足利尊氏方として毛利・吉川・熊谷氏など安芸国の有力御家人を率いて東上し、氏信が安芸国に常住するようになって城郭は拡大していったものと思われる。

以後、地頭勢力を家臣団化するとともに、川の内衆（水軍）を掌握し、広島湾へ進

武田氏略系図（可部町史による。○内の数字は銀山城主歴代）

源義光—義清—清光—武田信義—信光—信政—信時—時綱—信宗—



出するなど太田川中・下流域を領国化した。しかし、室町時代中期以降、毛利・吉川氏などが独立的な実力を振ったので、安芸一円を領国化するに至らず、直接支配は太田川下流域しか及ばなかった。支配した家臣達は、己斐・岸・伴・国重・尾首・白山・八木・高松城などに拠っており、銀山城はこれら要塞網の中心的位置を占めていた。

その後、元繁は有田の合戦（山県郡千代田町）で毛利元就に破れ、その子光和は山陰の尼子氏と結んだため山口の大内氏の攻撃を受け、光和の死後、1541年（天文10）大内義隆の命を受けた毛利元就によって攻め落された。銀山城陥落後も大内氏はこの城を重視し、しばらくの間城代を置き、毛利氏が手に入れたあとは元就が隠居所として居住したが、1591年（天文19）毛利輝元が広島城を築いてのち、山城である銀山城は次第に衰退し、廢城となった。

今も、銀山城の山頂の巨石には建物工作物の跡が遺存し、また、山頂から麓にかけての諸所には、千疊敷・高間・御門跡・馬場・馬返し・出丸などの郭が残っている。

このように、銀山城は安芸国の守護である武田氏の居城にふさわしく、規模・構造とも秀れたものであった。そして、銀山城の山裾には武田氏一族の城である岸城・伴城・国重城・尾首城などを配し、銀山城を擁護する形をとっている。

なお、広島市街地から北方約6kmという至近距離にある尾首城跡一帯は、ここ10余年間に大きく姿を変えた。水田が埋められ住宅が建ち並び、山を切り開いて団地ができる、茅葺や黒色だった尾根も赤・青・緑と色とりどりになり、鉄筋コンクリートのビルもあちこちに姿を見せるようになった。人口は急増し、今も増えつづけている。

参考文献『芸蕃通志』

安古市町役場『安古市町誌』 1970

祇園町教育委員会『史跡銀山城』 1965

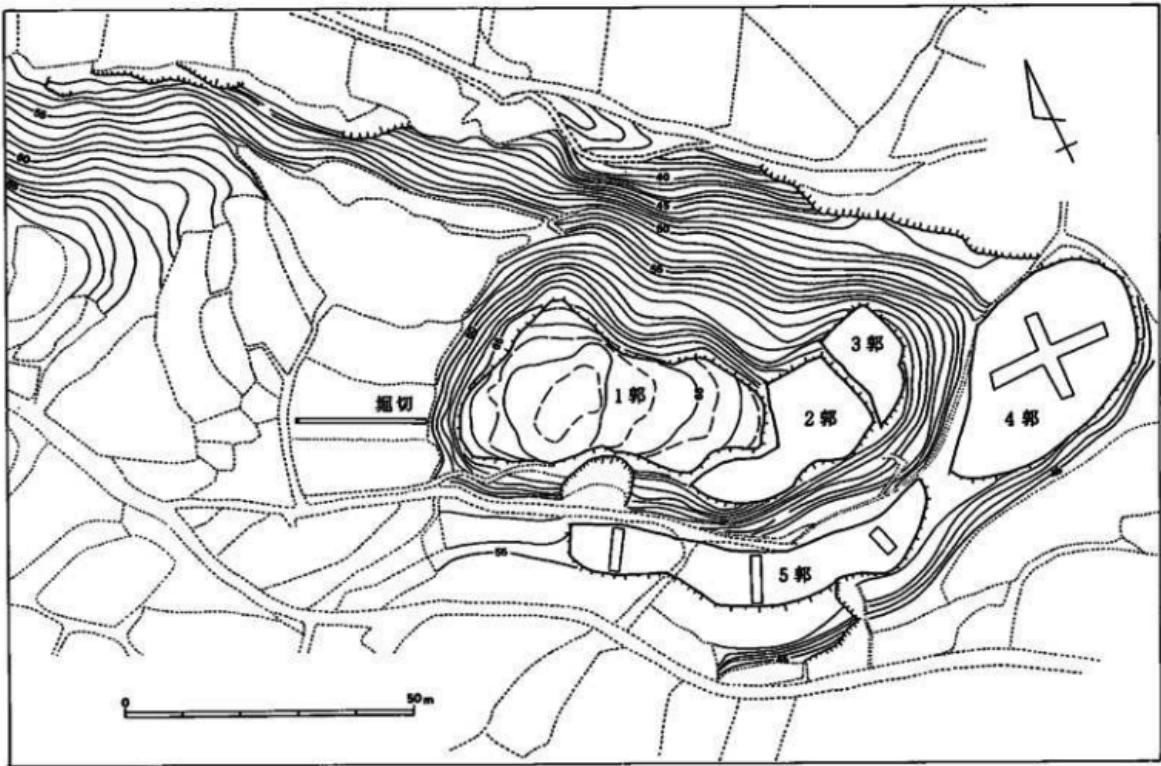
広島市教育委員会『山城』（広島市の文化財 第20集 1982）

III 調査の概要

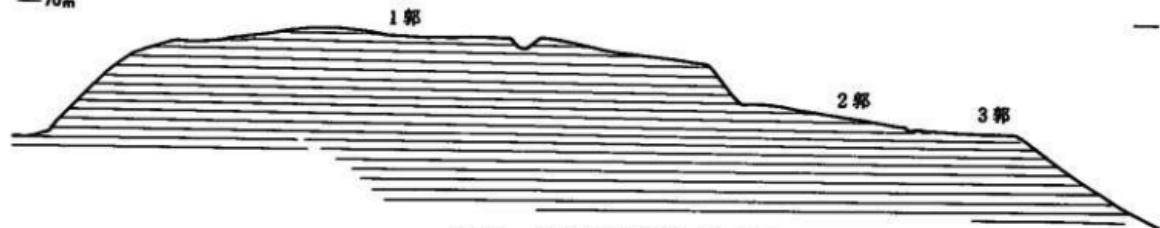
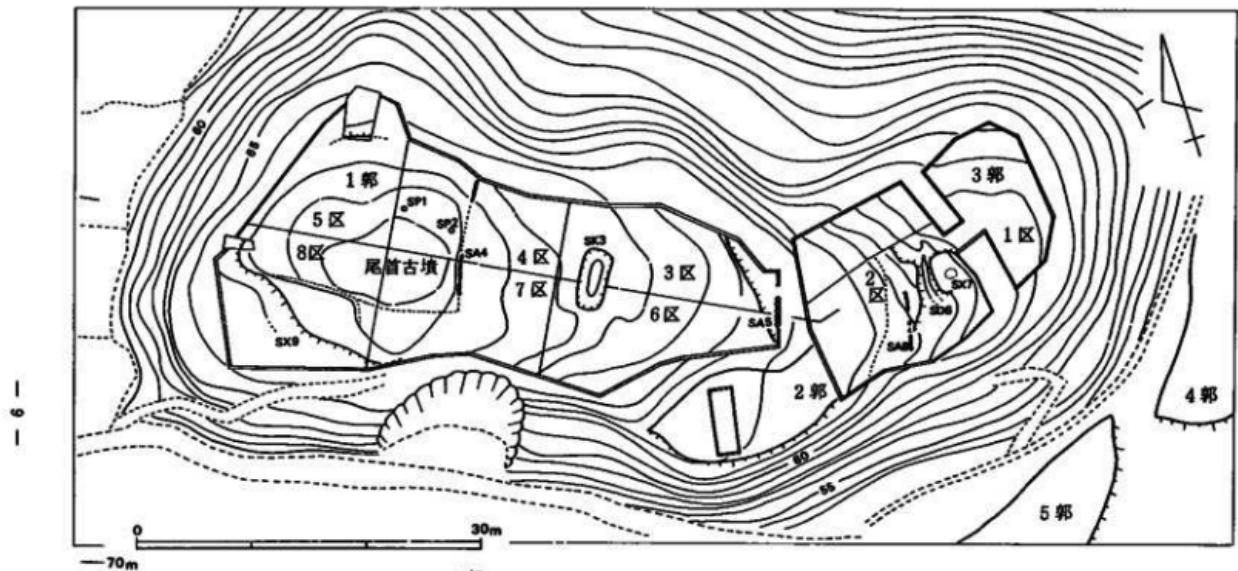
この調査は、県立学校建設に伴なう事前の発掘調査である。昭和57年7月5日から8月28日まで、のべ54日間にわたり広島県教育委員会文化課が調査を行った。

本城跡は、事前の踏査によると、銀山城から東方にのびる支尾根の背後を堀切で囲し、その前（東）に3つの郭を階段状にならべた単純な構造をなすものと考えられていた。そこで、調査にあたっては便宜的に、最高所を1郭として、東側へ順に2・3郭と呼称し、これらの郭群と15～20mの比高差にある東・南側の平坦面は、東のものを4郭、南のものを5郭と呼称した。このうち1～3郭については全面的な調査を行い、4・5郭、および西側堀切については、郭や堀切の構造、内容を確認するため、それぞれトレンチを設定して調査を行った。なお、全面的に調査を行った1～3郭について、3郭を1区、2郭東半を2区、1郭を3～8区に地区割りし、遺構・遺物の整理を行った。

調査の結果、城跡に関する遺構として、1郭で土塁（SK3）、石列（SA4）、小穴（SP1・2）、1郭と2郭の境で石垣（SA5）、2郭で石列（SA8）などを検出した。しかし、4・5郭のトレンチ調査では遺構・遺物の検出はできなかった。出土遺物には、土師質土器（壺）、鉄器（釘）がある。この他、1郭の調査時に本城築城時に破壊されたと考えられる古墳を確認した。この内容については大半が削平されているため明らかではないが、約20m前後の規模をもつと考えられ、それに伴って円筒埴輪や須恵器（壺、甕）、鉄器などが出土している。当初、予想していなかったこの古墳の発見により、調査期間の大半をこれに費やすことになったが、結局のところこの全容を明らかにするには至らなかった。なお、この他に1郭の3・6区では弥生土器も数点出土しており、この地が弥生時代以降何回も使用されていることが明らかになった。



第2図 尾首城跡地形図 (1:1,000)



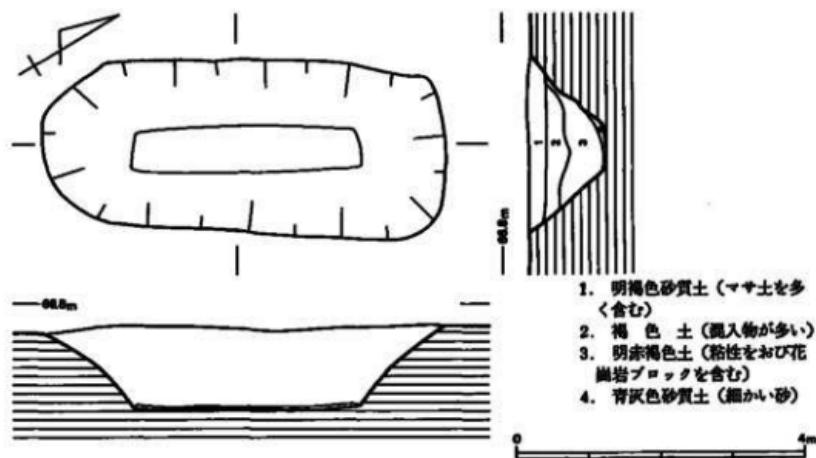
第3図 調査区及び遺構配置図 (1:500)

IV 遺構

城跡関係の遺構

1郭（第2・3図）

本城跡の最高所、標高65～66mに位置し東西に長い平坦部をもつ。全体的にみると西側（5・8区）がやや高く、東側（3・6区）にゆるやかに傾斜している。郭の規模は南北約30m、東西約50mを測るが、石列（SA4）を境として5・8区を中心とした北西の段と3・4・6・7区を中心とした東の段に分かれていた可能性がある。北西の段は石列の終る部分で西へ直角において東西15m×南北12mの方形の高まりとなり、東の段とは0.3～0.5mの比高差をもつ。本城の主体をなす1郭のうちでもさらに中心をなす段と考えることができる。東の段は東西30m×南北15mのはば方形に、北西の段の南側（長さ約15m）を加えたL字状をなす。中央には大形の土塹（SK3）がある。なお、この郭の盛土をたちわったところ、3・5区北半と8区南半は段をなすように造成されており（SX9）、ここから埴輪等がまとまって出土した。段のつながりや斜面の様子から、かつてはここに古墳があったことが推定された。



第4図 SK3実測図 (1:80)

S P 1・2 (第3図)

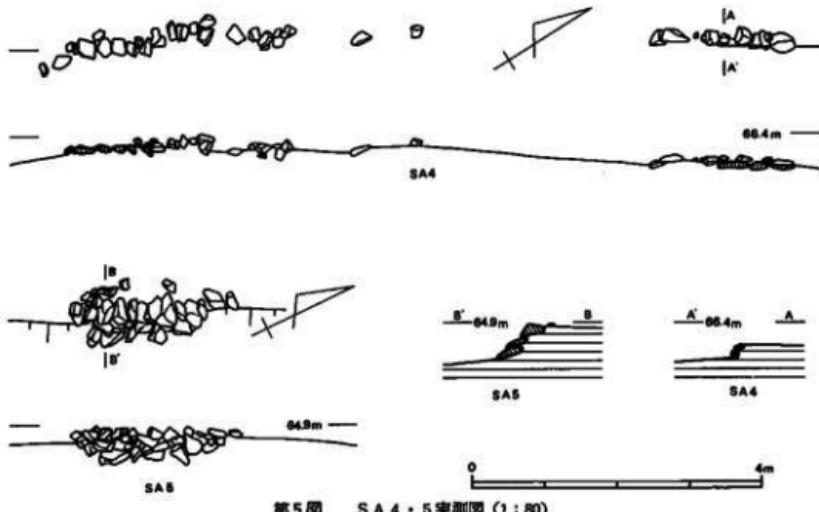
1郭の4区にある円形の小穴である。S P 1は上端径30cm、下端径20cm、深さ50cm、S P 2は上端径30cm、下端径21cm、深さ58cmを測る。建物の柱穴としてまとまるか否かは明らかでない。

S K 3 (第4図)

1郭の3・6区に位置する。平面形は長楕円形、断面逆台形状を呈する。長軸5.6m、短軸2.4m、深さ1.0mを測り、底面は幅40cm程度と狭い。埋土は4層に分れたが、このうちの第1・2層から土師質土器坏(第11図)がややまとまって出土している。なお底面には薄くではあったが青灰砂質土が堆積しており、かつては水がたまっていたものと思われる。

S A 4 (第5図)

1郭の4・7区にかけて、表土直下で南北約10mが遺存する石列を検出した。石列は遺存のよい場所で2段積が認められる。本遺構は1郭の最高所部から傾斜変換部分



第5図 S A 4・5実測図 (1:80)

にかけて存在することから、S A 5にみられるように本来は石垣状をなしていた可能性がある。1郭はこの石列を境に東西2段に分れるが、7・8区ではこの石列から西において南北に段差がついており、当初はここにも石列もしくは石垣があった可能性がある。

S A 5 (第5図)

1郭の東端部、3・6区にかけて検出した石垣状の遺構である。現存長は約2mで、3～4段の積石が認められる。この石垣は1郭東端の盛土をより強固にするため積まれたもので、基盤は地山上においてあるが、積方は乱雑で応急的である。

2郭 (第2・3図)

1郭の南東側に続くもので、平面形は1郭をとりまくようなL字状をなす。1郭との比高差は約4mである。2郭も細かくは0.5mの段差をもって東側と南側の2段に分かれるようである。東の段はほぼ方形で東西16m、南北17mを測る。東側先端部は西側部分を切った廃土で盛土し平坦面をつくっている。西の段は東西18m、南北8mを測り、平面形は半月形に近い。帶郭的性格をもつものと考えられる。なお、本郭についても盛土面をたちわって調査したが、この下から溝(S D 6)や石列(S A 8)などが検出された。

S X 7 (第6図)

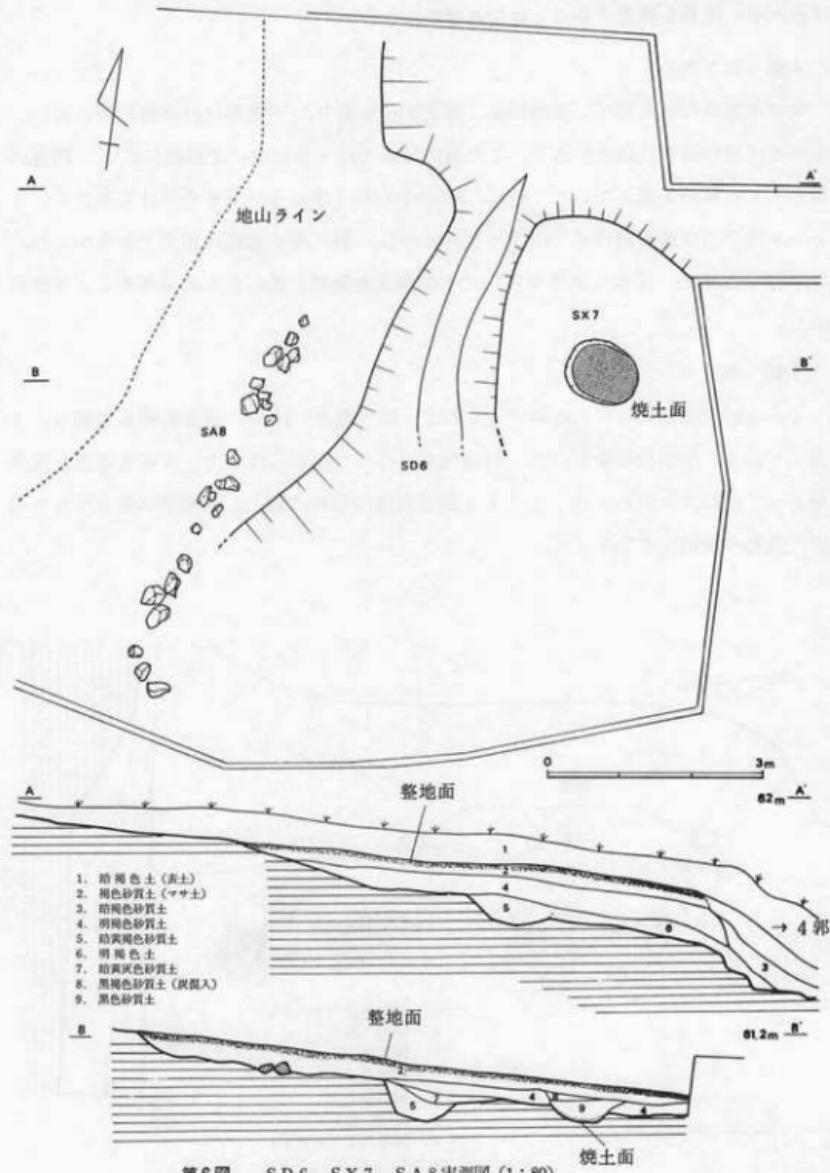
2郭の調査区端に位置し造成面下より小土塙を掘り込んだ面が存在した。この小土塙のプランはほぼ円形を呈し、100×90cm、深さ35cmを測る。塙底面及び壁は焼土化し、覆土も炭の混入が認められた。

S A 8 (第6図)

2郭の造成面下で南北方向に配される石列を検出した。石列は地山直上に存在し、南北両端部でのレベル差はほとんどない。またS X 7の存在する面とほぼ同一レベル同一層位にある点から、S X 7と密接な関係をもった遺構であったことが考えられる。

3郭 (第2図)

2郭の東側に配された東西10m、南北約15mの郭である。平面形は方形に近いが、南半では半月状の部分も認められる。2郭との比高差は約1.5mである。郭造成面で



第6図 SD 6, SX 7, SA 8実測図 (1:80)

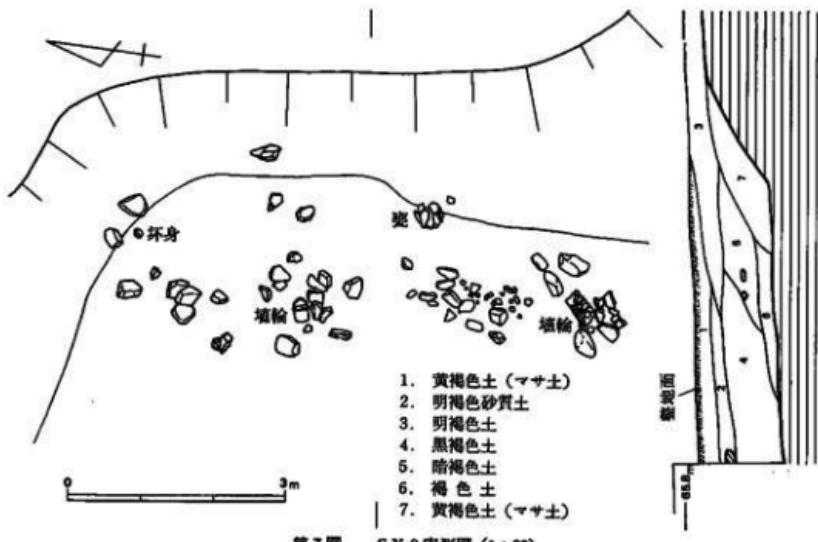
は柱穴等の遺構を確認することはできなかった。

4郭（第2図）

郭群の先端にある郭で、東西25m、南北20mを測り、平面形はほぼ椭円形に近い。3郭とは約10mの比高差があり、この城のなかでは1郭に次いで面積が広い。調査は畠としての開墾が進んでいたために、郭の中心に十字にトレントをあけてみたが、トレント部分では遺構面はすでに削平されており、柱穴等の遺構は検出できなかった。なお郭の造成は、尾根の高所を削ってその残土を先端に盛ったものであることを確認した。

5郭（第2図）

1～3郭の南側に帯郭状にのびるもので、幅（南北）10m、長さ約60mを測る。4郭より高く、やや段差をもつが、ほぼ同レベルでつながっており、4郭と密接な関係をもっていたことがわかる。ここも4郭と同様に後世に畠として開墾が進んでおり遺構、遺物は検出できなかった。



堀切（第2図）

独立丘陵状に遺存する本城跡の西側、1郭との比高差約6mの位置に東西約50mの開墾地がある。旧地形は東西にのびる尾根を西側で堀切状に切断し、東側を独立させたものであろうことが考えられたため、この部分にトレンチを設定して調査した。

堀切は、トレンチの西端では地表直下に岩盤があらわされたのに対し、中央部では深さ1mまで黒褐色土が堆積しており、さらに下には赤色粘土層もみられ、少なくとも現地表下1.5m以上の深さがあることが確認された。従って現在、約50mの幅をもつ堀切状の平坦面は後世の開墾等によるもので、当初は下端部幅約14mの小規模ながらも深いものであったことが考えられた。

古墳時代の遺構（尾首古墳）

1郭、5・8区の整地面下で、古墳時代の遺構、遺物を検出したが、1郭全体が築城や後世の耕作等により削平されており、遺存状態は良好でない。8区では郭としての整地面下で墳丘と思われる斜面と墳端と思われる平坦面（S X 9）を検出し、5区北端でも同様な削平面を検出した。これらを結ぶと平面形は直径約20mの半円形に近くなり、ほぼこの程度の規模をもつ墳丘があったことが考えられた。

S X 9（第7図）

1郭8区南西部の造成面下で地山の落ち込み及び平坦面を検出した。この平坦面で若干浮いた状態であったが礫、埴輪、土師器、須恵器、鉄斧等、多数の遺物が発見された。この出土状況はそれが墳丘から流れ落ちたものであるかのように観察されたことから、地山の落ち込みを墳丘の端、平坦面が墳丘外であったと判断した。

この落ち込み及び平坦面は5区においても観察できたが、墳丘の東側を明らかにすべく調査した1郭の4、7区にあけたトレンチではこれらは検出できず、従って墳丘の実態は明らかにできなかった。

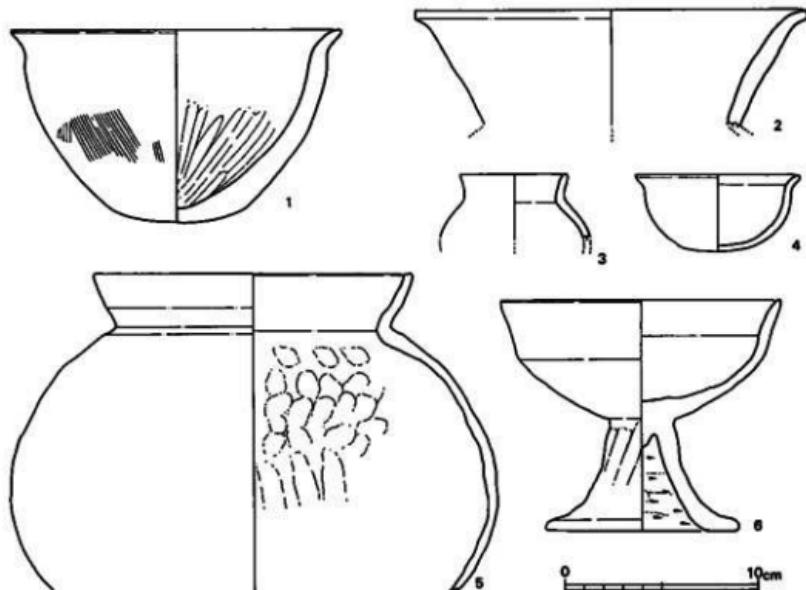
V 遺 物

出土遺物には土器、鉄器があるが遺構に伴うものは少ない。

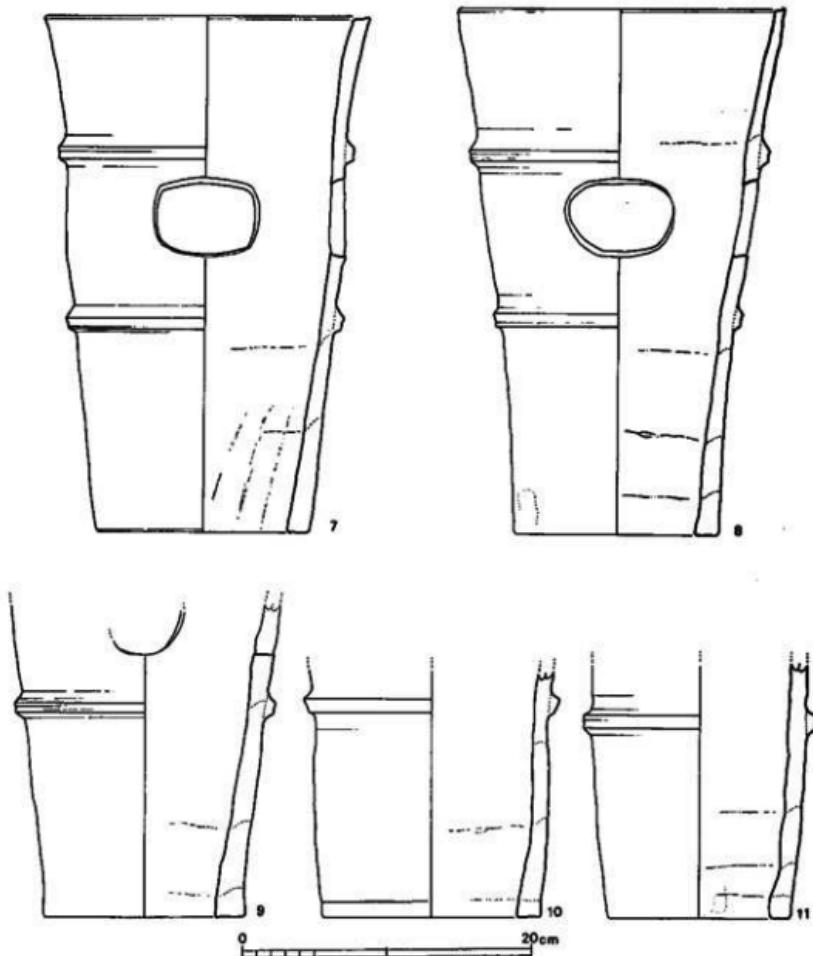
弥生土器 多くはS X 9及び3区・6区で出土しているが図示できるものは少ない。器種として壺、鉢（第8図1）がある。総じて底部丸底化が進み弥生時代終末期頃と思われる。

土師器 S X 9及び3区で出土している。器種として壺、甕、鉢、高杯（第8図2～6）がある。甕は口縁端部を肥厚させるが内傾する平坦面を形成し、胴部も若干ながら張り気味である。鉢は小形の種類に属し、器壁は薄い。高杯は塊状の杯部に扁平な裾をもつ脚が付く。5世紀代と思われる。

埴輪 S X 9及び5区表土下で出土している。器種は円筒埴輪のみである（第9図）

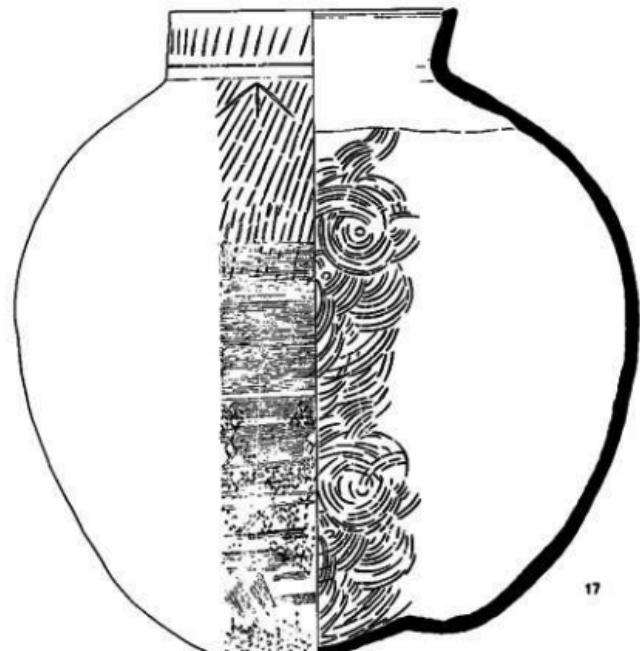
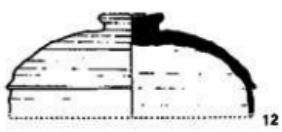


第8図 出土遺物実測図 I (1:3)



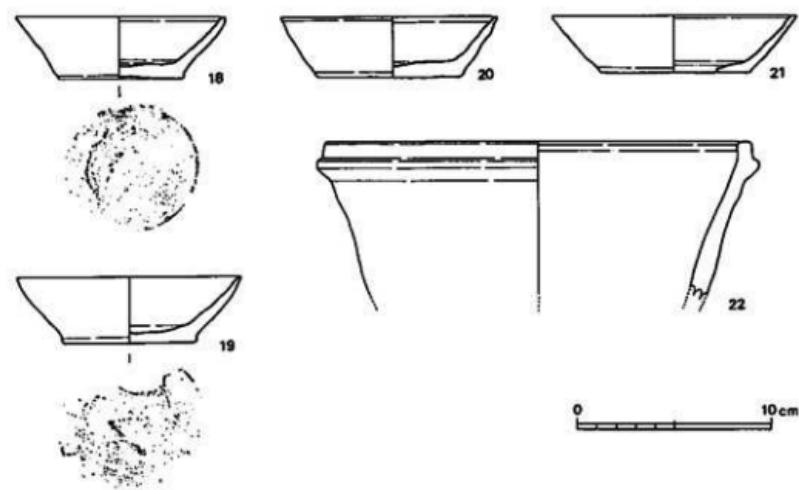
第9図　出土遺物実測図Ⅱ (1:4)

7～11)。総じてタガを二段有し、円形または方形気味のスカシをもつ小形品である。内外面の調整は最終段階で丁寧なナデが施され、ハケ調整は看取されない。基部は二分割程度で作られ、口縁部にかけて輪積みされている。タガの形状は扁平な台形状及び三角形のものも含まれるが台形状のものが90%を占める。細片が多いが20個体以上

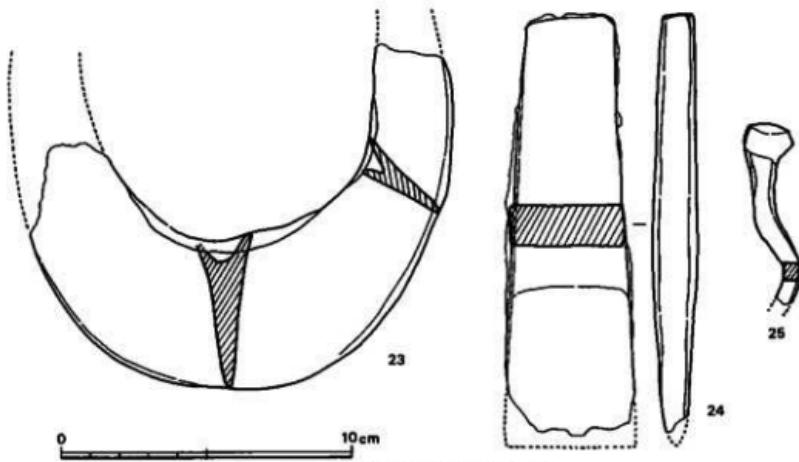


0 10cm

第10圖 出土遺物実測図Ⅲ (1:3)



第11圖 出土遺物実測図IV (1:3)



第12圖 出土遺物実測図V (1:2)

出土している。焼成は軟弱なものが多いが黒斑はない。形状などから円筒埴輪としては新しい時期（5世紀後半～6世紀）のものと思われる。

須恵器 S X 9 及び 5, 8 区の表土下で出土している。器種として蓋、坏身、壺（第10図12～17）がある。蓋は扁平な貼り付けのつまみをもち口縁部にかけて丁寧なつくりでシャープな感をもつ。坏身は高台の付かないもの（13～15）、付くもの（16）がある。壺は中形品で頸部にヘラ記号が認められる。12～14は5世紀後半代、16は7世紀後半代、17は5世紀後半代～6世紀と思われる。

土師質土器 SK 3 でややまとまって出土した他各地点の表土下で出土している。器種として坏、鍋がある（第11図）。坏は口径11cm前後でやや厚手のもの（18～20）と、口径12cm前後でやや浅く皿状をなすもの（21）の2種あるが、後者は1点しかない。また破損品を漆で接合したものもある。底部調整は総じて回転ヘラ切りである。鍋は凸帯を口縁下に付すもので煤の付着が認められる。

鉄器 S X 9 及び 2, 3 区で出土している。器種として鋤先、斧、釘がある（第12図23～25）。鋤先（23）の形状は緩やかなU字状を呈し、現長11.9cm、身部長5.5cmで、刃部は半円状を成す。挿入溝（袋部）は薬研状を成し深さ1cmを測る。3区出土。斧（24）の形状は断面矩形の板状を呈す。現長14.3cm、厚さ1.6～1.1cm、幅は刃部で約4.4cm、尻部で3cmを測る。S X 9 出土。釘（25）は頭部が矩形を呈し、全長6cm以上、厚さ0.6cmの断面方形を呈する。鋤先は各時期共通した一般的なU字形であり時期は不明である。

鉄斧は板状であり古い要素をもつ。釘は中世～近世と考えられる。

その他の出土遺物として近世陶器、磁器の小片がある。また鉄器を除く図示した土器については観察表を参照されたい。

出土遺物の概要は以上であるが、土師質土器を除き図示し得た大半がS X 9 出土のものである。S X 9 の遺物は時期的にみて弥生時代終末～7世紀後半代までのものを含み、出土状態も層位的にとらえられるものではない。しかし概観すると古墳時代のものが多い。S X 9について古墳の基底部のライン及びテラス面として見る根拠の1つに埴輪の出土状態がある。埴輪はこのテラス面より若干浮いた状態ではあるが完形

品が転倒した状態で出土していることが上げられるが、当該地を古墳築造後から城跡築城前の間に再利用した時期のある可能性も考えられ、S X 9 の遺物の現在はその際の移動遺物としてとらえられるものであろうか。また S X 9 の不整形な落ち込みラインもその際影響されたものであろうか。いずれにしろ尾首城跡築城以前に 5 区、8 区の最高所部位に古墳が存在したことはほぼ確実であり、大半の土師器、須恵器、埴輪は期差がありながらも古墳に関連する遺物としてとらえられるが、古墳の形状について時の断定材料とはなり難い。

土器観察表

(1) 弥生土器 (第 8 図)

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
1	鉢	口径 17.1 器高 9.9	底部は丸底を呈し、体部は腰部に内湾し口縁部は強く外反する。 体部の器壁は厚い。	口縁部は内外面共にヨコナデ。 体部は外面タテハケ、内面ヘラミガキ。	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 良好 出土地点 S X 9

(2) 土師器 (第 8 図)

番号	器種	法量 (cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考
2	壺	口径 20.2	口縁部は外上方に開き、端部外面に面をもつ。	口縁端部はヨコナデ、外面はタテハケ (?)。	色調 赤褐色 胎土 砂粒を若干含む 焼成 良好 出土地点 S X 9
3	壺	口径 5.5	体部は丸みをもち、口縁部はわずかに外傾し、まっすぐ伸びるが短い。 器壁はうすく、小形である。	内外面共に著しく荒れている。 口縁部は内外面共ヨコナデ。	色調 外面茶褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 良好 出土地点 1 郡 6 区
4	鉢	口径 8.5	体部は扁平で器高も低く丸みをもち、口縁部は腰かに外反する。 器壁はうすく小形品で、色調が他と異なる。	内外面共に荒れている。 口縁部は内外面共ヨコナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 砂粒をほとんど含まない 焼成 やや歿 出土地点 1 郡 6 区
5	壺	口径 16.4 体部最大径 25.2	体部は球形で張り、口縁部はく字状に折れ外上方にのびる。 端部は平坦面を呈し、内面に肥厚する。	口縁部は内外面共にヨコナデ。 体部は内面指頭成形、外面ナデか。	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒を若干含む 焼成 良好 出土地点 1 郡 8 区
6	高壺	口径 14.4 器高 5.2 脚部 脚高 5.8 脚端径 9.8	壺部は体部で丸みをもち、外上方に口縁部はのび、わずかに壺に縫をもつ。 脚部は側で強く開く。	壺部は内外面共ヨコナデ接合の凸凹がみられる。 脚部は外面タテハケ、内面ヘラ削り、端はヨコナデ。	色調 淡茶褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 良好 出土地点 1 郡 3 区

(3) 墓輪（第9図）

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考	
7	円筒埴輪	口径 器高 底径	22.5 35.7 14.7	タガ2段を有し間にやや方形気味のスカシを1対もつ。口縁部はやや外反気味に開き口唇部はやや凹部をもつ。	基部内面は幅2~3cmの板状工具の圧痕あり。内面は丁寧なナデ。タガは貼り付けの後、強く丁寧にナデている。外面は丁寧なナデ。	色調 淡褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 良好 出土地点 SX 9
8	円筒埴輪	口径 器高 底径	22.6 36.4 14.1	タガ2段を有し間に円形スカシを1対もつ。タガは突出度の低い断面台形状を呈する。口縁部はやや直線気味に斜め上方にのびる。	内面丁寧なナデ。外面基底附近に指頭圧痕が認められるが丁寧なナデで消されている。タガは貼り付けの後強いナデ。	色調 淡褐色 胎土 石英、砂粒を多く含む 焼成 良好 出土地点 SX 9
9	円筒埴輪	底径	13.9	円形スカシを1対もつ。基部は底段のタガまでゆるく内湾気味に斜め上方にのびる。	内面は丁寧なナテ方向へのナテか。外面はナテ。基部は輪積み痕をのこす。	色調 淡褐色 胎土 石英、赤色粒子を含む 焼成 やや軟弱 出土地点 SX 9
10	円筒埴輪	底径	15.1	基部と思われる端部直近上方に一条の沈線をもつ。タガは突出度の低い断面三角形状を呈す。	内外面とも丁寧なナデ。	色調 淡褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 良好 出土地点 SX 9
11	円筒埴輪	底径	12.6	タガは突出度の低い断面台形状を呈す。	内外面とも丁寧なナデ。基部内面指頭圧痕が認められる。	色調 淡褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 やや軟弱 出土地点 SX 9

(4) 須恵器（第10図）

番号	器種	法量(cm)	形態の特徴	成形技法の特徴	備考	
12	蓋	口径 器高	12.5 5.4	天井部に扁平な中凹み状のつまみをもつ。口縁部との境に突出した棱線をもつ。	天井部約1/4回転ヘラ削り、他は丁寧な回転ナゲ。マキアゲ、ミスピキ。	色調 淡灰色 胎土 微砂粒子を含む 焼成 耐熱 出土地点 SX 9
13	杯身	受部径	12.3	半球形気味の体部をもつ。たちあがりはやや斜め上方に向ひるか？受部内面に凹部を形成する。	体部下半約1/4回転ヘラ削り、他は丁寧な回転ナゲ。マキアゲ、ミスピキ。ロクロ回転は左まわり。	色調 淡茶褐色 胎土 微砂粒子を含む 焼成 やや軟弱 出土地点 SX 9
14	杯身	口径 受部径 器高	10.2 12.9	受部内面に若干の凹部をもつ。たちあがりはやや内湾気味で、口縁部内面に平坦面を形成する。	内外面とも丁寧なナデ。マキアゲ、ミスピキ。 (断面セピア色を呈す。)	色調 青灰色 胎土 微砂、白色粒子を含む 焼成 耐熱 出土地点 SX 9
15	杯身	口径 受部径 器高	10.0 12.2 3.5	受部内面に若干の凹部をもつ。たちあがりは垂直気味。体部はやや扁平である。	体部下半約1/4回転ヘラ削り、内面は丁寧な回転ナゲ。 (外側は自然釉付着) (断面セピア色を呈す)	色調 淡黄灰色 胎土 故砂粒子を含む 焼成 耐熱 出土地点 SX 9
16	杯身	口径 器高	12.2 3.0	体部は直線気味に外方へのびる。内面、底部と体部との境に若干の凹部を形成する。底部に小さい貼付高台を付す。	内外面とも最終的には丁寧なナゲ。底部外面、回転ヘラ起し底面あり。マキアゲ、ミスピキ。	色調 淡灰色 胎土 故砂粒子含む 焼成 耐熱 出土地点 SX 9
17	短頭壺	口径 器高	14.7 33.5	珠形の体部をもつ。口縁部は垂直に短くたもあがり口縁部は平面で形成する。体部外表面に焼成時に際して須恵器杯身片付着。頭部附近にヘラ記号あり。体部半分自然釉付着。	内面は頸部以下同心円タタキ。外面上半、平行タタキ。中位、タタキのちカキ目。下半、不定方向のタタキのち乱雜なカキ目。口縁部にヘラ状工具による縱方向の四点を施す。	色調 淡緑色一部灰色 胎土 故砂、石英を含む 焼成 やや軟弱 出土地点 SX 9

(5) 土師質土器 (第11図)

番号	器種	法量(cm)			形態の特徴	成形技法の特徴	備考
18	壺	口径 器高 底径	10.7 3.1 6.6	体部は斜め上方にのび、口 縁部はやや内湾する。 底部は棱をもつ。	内外面ともナデ整形。 体部内面のナデはヘラ使用 か。 底部は左まわりのヘラ切 り。	色調 淡茶褐色 胎土 長石・石英粒含む 焼成 良好 出土地点 SK 3	
19	壺	口径 器高 底径	11.6 3.4 6.9	体部は斜め上方にのび、口 縁部はやや内湾する。 底部外面は棱をもつが内面 はなめらか。	内外面ともナデ整形 底部は左まわりのヘラ切 り。	色調 淡茶褐色 胎土 長石・石英粒含む 焼成 やや軟 出土地点 SK 3	
20	壺	口径 器高 底径	11.1 3.1 7.2	体部は斜め上方に直線的に のびる。 口縁部はやや尖る。	内外面ともナデ整形 底部は右まわりのヘラ切 り。	色調 淡茶褐色 胎土 長石・石英粒含む 焼成 やや軟 出土地点 SK 3 割れたものを漆で補修	
21	壺	口径 器高 底径	12.6 3.6 7.7	体部は斜め上方に内湾ぎみ にのびる。 底部外面は棱をもつが、内 面はなめらか。	内外面ともナデ整形 底部はヘラ切りか。	色調 淡茶褐色 胎土 長石・雲母粒含む 焼成 やや軟 出土地点 SK 3	
22	鍋	口径	22.0	体部は斜め上方にのび口縁 部は直立する。口縁部にタ ガをもつ。	内面強いナデ、外面はユビ オサニの後、弱いナデ、タ ガは貼り付け。	色調 暗褐色 胎土 砂粒を多く含む 焼成 やや軟 出土地点 SK 3	

IV まとめ

尾首城跡の調査は、県立学校建設に伴なう城跡の記録保存を目的とするものであった。ところが、この調査の結果、この地には城跡だけでなく、かつては古墳もあったことが明らかとなった。以下今回の調査の概要について要約してみたい。

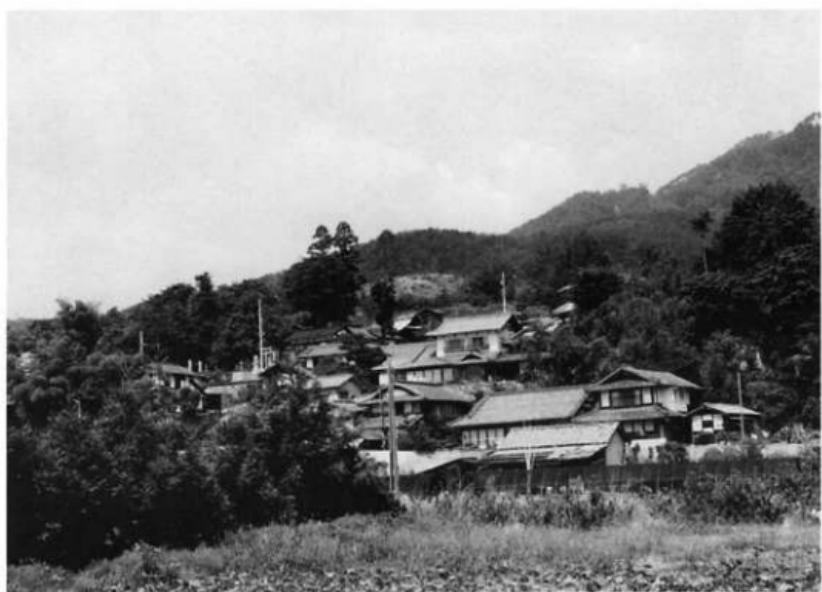
尾首城跡は、文献がなく、文献からの検討はできなかったが、銀山城跡のある武田山東山麓に位置し、また独立した山城としては規模も小さく、立地条件もよくないことなどから、銀山城の支城の一つと考えられているものである。遺構は、武田山から東にのびる支尾根を利用したものである。背後は掘切で囲み、その前面（東側）尾根上に4段の郭を階段状に、そして南側に3段の郭を帯郭状にならべただけの単純な縄張をなしている。それぞれの郭は切・盛土により造成され、盛土だけでは弱い個所には部分的にではあるが石垣もみられる。郭の構成は、頂部の1郭が最大で先端部にある4郭がこれに次ぐことから、これらが中心をなすものと考えられるが、4郭の前面は水田となってゆるやかに下っており、前面の防禦はないに等しい。また1郭についても背後の掘切に面する位置に通常みられる土壘、柵等の施設はなく、周囲に縄掘等の防禦施設もないことから、全体的に防禦・戦闘機能は極めて弱い城ということができよう。また出土遺物については、1郭で少量の土師質土器が発見されているが、山城で通常みられる陶磁器類は皆無であり、ここで常駐あるいは長期間の滞在はなかつたことが考えられる。以上を総合すると、この城は、兵時における独立した山城と考えるより、調査前からいわれていたとおり銀山城直下にあって大手道周辺を見張り、守るために出城的性格の強い城であったことが推定される。

1郭で発見された古墳（尾首古墳）は、城の構築等により削平されその痕跡しかとどめないものであったが、径15m以上の墳丘をもち、須恵器、鉄器を副葬し、埴輪をめぐらしたものであったことが推定された。須恵器等により5世紀後半に築成されたことが考えられたが、南約1kmには三王原古墳、さらに南には池の内第2号古墳、安川をはさんだ北側には神宮山1号古墳や宇那木山2号古墳などの前半期の古墳が知られており、太田川下流域における古墳の発展をみると上で貴重な発見となつた。

図 版



a 遠 景 (北より)



b 遠 景 (東より)



a 1 郭 全 景 (東より)



b SA 5 (南より)



a SK 3 (南より)



b SX 9 (西より)



a SX 9 墓輪出土状態（南より）



b SX 9 墓輪出土状態（北より）



c SX 9 須恵器出土状態（南より）



d 3区高杯出土状態（南より）



a 2郭, 3郭全景（西より）



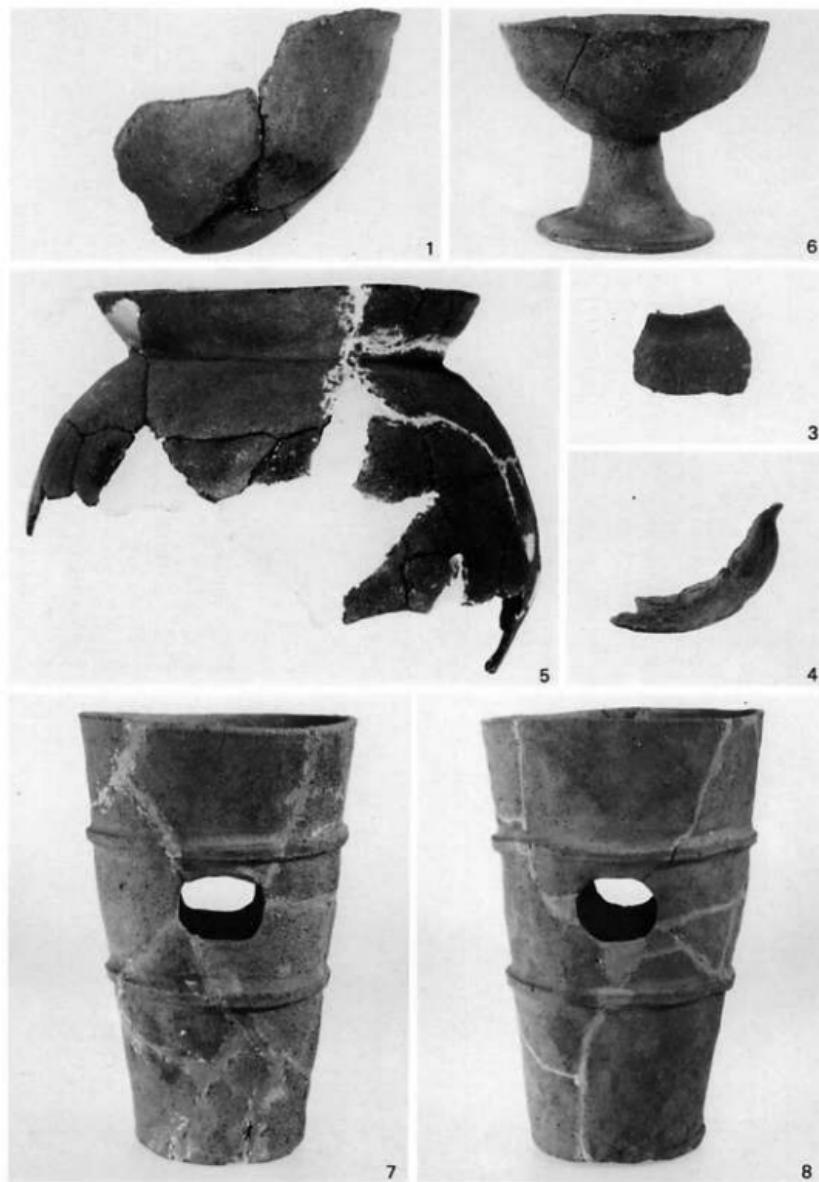
b SD 6, SX 7, SA 8 (南より)



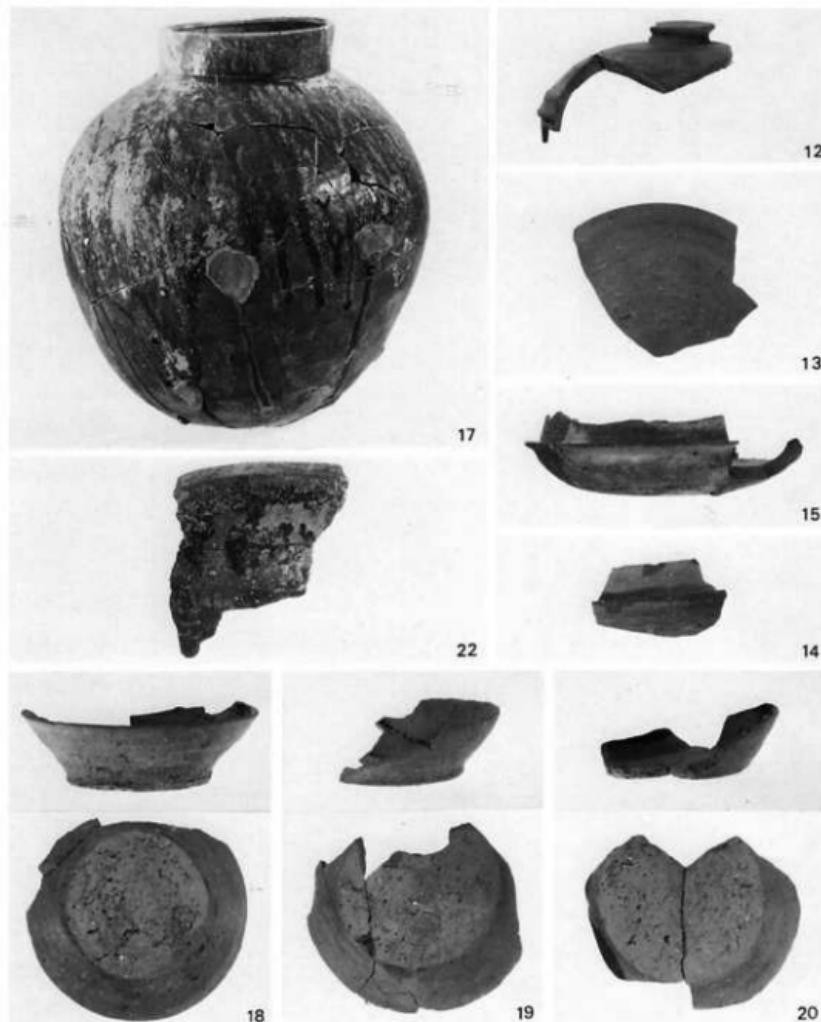
a 2郭, 3郭土層断面(南より)



b 発掘調査風景



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

尾首城跡発掘調査報告
—広島県立祇園北高等学校建設にかかる—

1984年3月

編集・発行 広島県教育委員会
印 刷 株式会社 柳盛社印刷所